

所属 高知西高校
氏名 谷 富貴
R G S H 3

研究テーマ：語彙サイズを向上させるための指導の工夫

1 研究の背景

(1) 高知西高校について

「派手ではないが、明るく素直でまじめ」と形容されている（学校長）生徒たちである。入学時には生徒のほぼ全員が大学進学を希望している。

英語の授業が他に比べて多い英語科では、センター試験の平均点は 150 点を超え、語彙サイズも比較的大きい。一方、普通科の多くの生徒にとって英語は必須教科であるにもかかわらず、苦手教科となっており、点数も取れないため 3 年生になると焦りを感じる生徒が少なくない。

(2) 対象のクラス

普通科は 2 年次から、文型と理型に分かれる。今回対象としたのは、2 年生の理型 α クラスにおける英語である。このクラスの生徒たちは、大変素直であるが、反面、常に受動的で critical に授業を受けることはない。宿題が出されるとするが、自ら予習をする生徒はほとんどいない。

2 リサーチクエスト

- ・ 受容語彙サイズを増やす

望月テスト 1000 語レベルから 5000 語レベルまでで、平均 100 語増を目指す。

3 予備調査

予備調査 1 授業観察の結果

予備調査 2 英語力を示すデータ

- ・ 望月テストによる推定語彙サイズ 3,001 語（平成 15 年 5 月実施）
- ・ ベネッセ・スタディーサポート（平成 15 年 4 月実施）
- ・ 定期テスト（平成 15 年前期中間テスト）
- ・ 高知県統一学習支援テスト（平成 15 年 4 月実施）

予備調査 3 アンケート、授業評価の結果（平成 15 年 5 月実施）

4 仮説の設定

仮説 1

毎時間、語彙小テストを行えば、語彙に対する意識が高まるだろう。

仮説 2

毎時間、語彙リストを使ってゲーム形式で語彙タイムレースをすれば、楽しみながら語彙サイズを増やすことができるだろう。

仮説 3

教科書の本文を繰り返し何回も読めば、語彙リスト等で用いた語彙が用法とともに定着しやすいだろう。

5 計画の実践

1 vocabulary list を用いた語彙インプット

教科書の各レッスンごとに vocabulary list を作り、毎時間ペアで vocabulary input を行う。list の項目数は 30 とし、毎時間発音した後、次のようなやり方で行う。各 70 秒を制限時間単位とする。

1・2 時間目：生徒 1 がリストを見ながら、英語をランダムに言う。生徒 2 はその英語の意味を言う。生徒 1 は生徒 2 のリストにチェックを入れていく。

3～5 時間目：生徒 1 が日本語を言い、生徒 2 はリストを見ないで英語を言う。

6 時間目以降：生徒 1 が英語で定義や言い換えを言い、生徒 2 はリストを見ながら該当の語句を言う。

2 語彙テスト(1)

「大学入試受かる基礎英単語・熟語 ソクラテス入門1299」,Gakken

毎時間授業のはじめに受容語彙テストを行う。教員が単語を発音し、生徒はその代表的な意味を日本語で書く。6ページ30個程度の中から10個出題。

3 語彙テスト(2)

上記の単語集を二巡した後は文章の中での該当語の用法を問う問題形式とする。10ページから10語出題。

4 和訳先渡しによる繰り返しを重視した授業

テキストの英文と和訳を授業の最初に配布し、それをもとにさまざまな活動を行う。英文自体を何度も読むように仕組み、中でもペアでの活動や音読活動を重視してアウトプットにつなげるように留意して語彙や表現の定着を図る。

6 実践の結果

望月テストによる推定語彙数

クラス平均

平成 15 年 5 月	3,001 語
平成 15 年 12 月	3,215 語
語彙数の伸び	214 語

語彙数が増えた生徒数：32 名

語彙数が減った生徒数：8 名

変化がなかった生徒数：1 名

7 結果の検証

約 8 ヶ月の実践の結果、望月テストによる語彙サイズはクラス平均で 214 語増えた。この数字は目標値の 2 倍強であり、思ったよりよい結果を残すことができた。

リサーチを実践するために立てていた仮説は、個別に取り出して検証することはできないが、全体としては目標の達成に有効であったと思われる。

このクラスは比較のおとなしく素直な生徒が多いため、授業中に教員の指示する活動にまじめに取り組んでくれた。特に、毎時間行った語彙リストを使っの語彙タイムレースは、普段おとなしい生徒や、やや集中力に欠ける生徒も積極的に取り組んでいる姿が印象的だった。短めに設定された時間内に語彙リストのすべての語句を正しくカバーしようとして、家庭でも覚える努力をするようになった生徒がいたのは収穫であった。

また、毎時間授業はじめに実施した語彙小テストは、生徒が楽しんで受けたいものではなかったが、使用した単語集を 8 ヶ月で四巡することができた。繰り返して同じ語彙に戻って覚えようとしたことで、生徒の長期記憶に多少は貢献したと思われる。

さらに、教科書の各課は 1 課を除いて和訳先渡し方法で実施した結果、ペアや小グループで Q & A・shadowing・read & look-up などの口頭練習をする機会が非常に多かった。生徒は授業中に休憩することなく英文の黙読・音読などの活動に費やしていたことになる。そのことも語彙の定着に貢献したと言えるだろう。

8 成果と今後の課題

目標値を大幅に上回る語彙数の伸びを観測できたことは大きな成果であった。同時に、生徒はこの授業形態を受け入れて、ペア活動や口頭練習に積極的に参加する姿勢が育ったことも今後につながる成果である。

また、私自身が数値化した目標を持って授業に臨んだことで授業の目標もより明確になったように感じられる。時期を定めて検証を行うことの重要性が再認識できた。

語彙数は確かに増えたがまだ十分でないことは明らかである。また、果たしてこれが長文読解力につながったかどうかは検証できていない。やっと長文読解への第一歩を踏み出したところである。

今後はさらに多くの語彙を使える形で定着させる必要があるとともに、より多くの長文を読む活動を取り入れて、初見の長文でも正しく読めるように指導する必要がある。